

煎本 孝

もし今でも、人類学が「人間とは何か」という永遠の問いへの解を求め続けるのであれば、人間性の探究こそが、時代を超えて、人間の理解のための主題となり得るはずである。私はこのエッセーにおいて、今年私がかかり出版された四冊の書物に基づきながら、さまざまなフィールドでの人間性の経験的観察と記録が、人間の理解にとって意味があり、同時にそれによって二十一世紀の私たちの現代社会の有り様を照射するといかに見えるのかを考えてみることにしたい。

「トナカイ遊牧民、循環のフィロソフィー」極北ロシア・カムチャツカ探検記(煎本孝著、明石書店、二〇〇七年)で取り上げたように、コリヤークの人々は夢と現実とをつなぎ、死後も上界でこの世と変わりなく生活している人々の地上への再来を信じている。これらは、一年のサイクルの中で自然が生と死をく

フィールドからのメッセージ

21世紀現代社会を照射する



豊かな人間性問う

り返すように、自分たちも宇宙における生と死の永遠の循環のフィロソフィーの中で生きるのである。同時に、彼らは疑い

社会状況の中で生きる北方圏地域の少数民族。圧倒的な力をもつ多数派集団と共生する彼らの民族性(エスニシティ)と帰属性(アイデンティティ)の動態は、「北の民の人類学」強国に生きる民族性と帰属性(煎本孝、山田孝子編著、京都大学学術出版会、〇七年)にみる事ができる。ここでは、人間が自己の、あるいは集団の生存のために努力し、また自己を

を示唆してくれるのである。このように、地球規模で進行する急激な変動の時代、北方文化を語ることは、単なる地域研究の枠を超えて、人類学が抱えている普遍的課題に立ち向かうことである。現代文化人類学の課題「北方研究からみる」(煎本孝、山岸俊男編著、世界思想社、〇七年)は「人

人類学の課題は、さまざまな学問分野を横断、統合するような「人間性」の探究という、より普遍的な共通の主題へと収斂することが示される。さらに、この探究のためのより具体的な方法論として、社会心理学による実験的アプローチと文化人類学のフィールドワークによるアプローチの試みが、「集団生活の論理と実践―互恵性を巡る心理学と人類学的検討」

拠点(北海道大学、リダー 山岸俊男教授)が今年度から新たに始まっており、「人間性」の理解がさらに進むものと考えている。ところで、これらフィールドでの人々の自然と結びついた生活と豊かな超自然的な世界、互恵性の理念に基づいた社会を、私たちの現代社会に照射すると、私たちははかなり特殊な方向に進んでいることがわかる。国際社会の中で生き残るため、経済至上主義、競争原理主義、点数評価主義のもとに私たちは生きざるを得ないが、同時に、これにより人々が本来の豊かな人間性を失いつつあることも事実である。私たちが本来の人類の未来と心とを取り戻そうとするのであれば、本源的な人間の心を知る必要がある、そのためには「人間とは何か」という永遠の問いはまだ続いているのである。

もなく私たちと同時代に生きており、ペレストロイカ以後の急激に変化するロシアで民族と国家とが対峙し、新しい文化が創造される最前線に立っている。

この状況はコリヤークにとどまらず、ユーラシアと北アメリカを含む北方圏地域に広く見られる。ロシア、アメリカ、中国などの強国において、さまざまに揺れ動く

自然と人間との関係の中で、あるいは人間と人間との関係の中で位置づけ、生きるための意味をさがし求めようとするさまざまな場面が描き出されている。ときに、それらは対立を含み、またあるときには共生を含んでいる。二十一世紀が紛争から和解、そして対立から共生への世紀へと歩み出せるよう、人類学の事例は共生の理念の重要性

間とは何か」というテーマのもと、現代の文化人類学が直面する喫緊の問題を鋭くえぐり出す。北方研究の展開、心の文化・生態学的基盤という理論的枠組み、研究の社会的役割、地球環境問題と開発、歴史性、伝統の再構築という課題がアイヌ、チュクチ、イヌイト、ハンティ、サハの事例をもとに論じられ、北方研究からみた現代文化

(煎本孝、高橋伸幸、山岸俊男編著、北海道大学出版会、〇七年)である。これは、人間性に直接結びつく、人間の「心」の解明への挑戦であり、心理学と人類学の新しいコラボレーションである。これは今までの二十一世紀COEプログラムの成果でもあるのだが、これを発展させたグローバルCOEプログラム「心の社会性に関する教育研究

とく